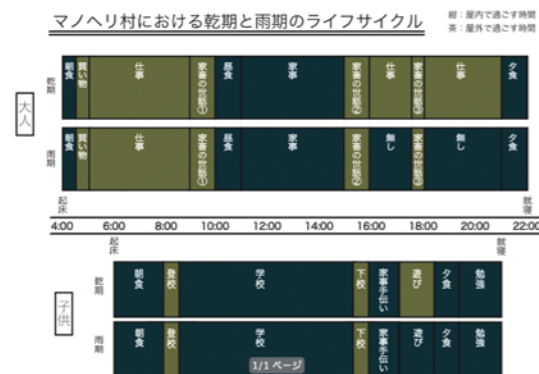


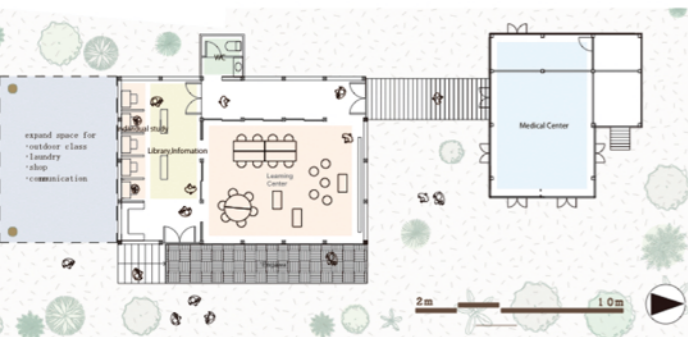
このプロジェクトは、ミャンマーのエーヤワディ管区マノヘリ村にラーニングセンター/メディカル施設を集落住民とともに建設、及び運営の支援を行うというものです。

マノヘリ村の様子としては、1987年の区画整理により、グリッド型からプリミティブな在来的高床式住居が多く、気候は5月下旬から10月中旬にかけて深刻な雨期であることなどが挙げられます。

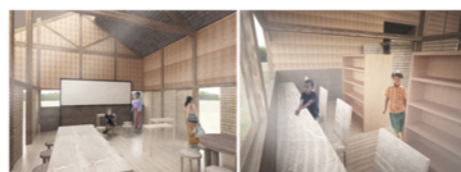


マノヘリ村での視察やインタビュー等のフィールドワークの結果としては、道沿いに並びつつ住居の道路ごとの形態の違いや、特徴の分布図の作成、ある家庭における乾期と雨期のライフサイクルを大人と子供それぞれ調査し、屋内で過ごす時間と屋外で過ごす時間ごとに色別けして視覚化することで、この村の問題点が浮かび上がってきました。

フィールドワークから抽出されたマノヘリ村の問題点を主に3つに分けると、成人児童の教育機会の不足、悪質な衛生環境と自然環境に左右されるコミュニティです。これを受けて提案されたのが、ベニアハウスのラーニングセンターです。ラーニングセンターは、教育機会の場及び衛生教育プログラムを創造するとともに、住民主体の建設、運営を通してコミュニティの強化を目的とすることをコンセプトに考えられました。工法についてもスタディを重ね、材料も現地のものを用いています。



完成したラーニングセンターの図面です。地域特有のデザインを踏襲しており、40人規模が学習できるスペースが設けてあります。縁側は広場と道路に向かって開けているので住民の交流スペースとなっています。



このプロジェクトに介入するにあたって、すぐにミャンマーに行くことができないので、私が考えた介入法は、ベニアハウスの工法について潜入する事です。今回は家具について考えました。

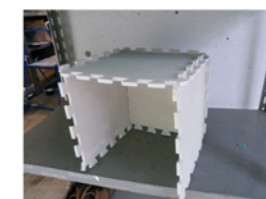


そこでこのベニアハウスの模型に注目しました。これはボード紙を切り出して、部材を組み合わせて、実際のベニアハウスにとっても近い状態で再現されている模型です。この模型から、私が考えたベニアハウスとは模型がそのまま建物になったような簡易的なものであると位置づけました。そこでベニアハウスの家具のコンセプトとして簡易的、組み立て式で子供向けという3つを設定しました。



私はこれらから、パズルマットを連想しました。パズルマットは主に幼児向けでフローリングの保護等に使われますが、用途はマットだけでなく立体的に組み立てて遊ぶなど様々です。

これから考えた新たな家具の提案として、一辺30cmの木製のパズルマットを作成して、組み立て式の家具としようと考えました。木製パズルマットの可能性としては、自由に組み立て、組み替えができるため、用途に応じて大きさの変化ができ、ばらせば平面になるので収納がしやすく、簡易的なつくりなので子供でも扱えます。また机だけでなく椅子や棚にも変化でき、用途が多様であることが挙げられます。



まとめ

ミャンマーラーニングセンターのベニアハウスプロジェクトに介入してみて、私はこのプロジェクトが何故ミャンマーでなければならないのかと疑問に感じました。特に自ら家具を提案するに際して、マノヘリ村という未知で距離的にも遠い地で行うのは何故だろうと考えました。私の結論としては、ベニアハウスという簡易的な住宅のプロトタイプを試作するにあたって、何もなかったところにただ建設するのではなく同時に途上国の支援に携わることによって、ベニアハウスがより現実的なものとなると共にベニアハウスの社会的な意義を見いだすことができるようになるためだということです。